花ぶさとうげ

岸　武雄

絵　梅田俊作

花ぶさとうげ

岸　武雄・作　梅田俊作・絵

913

岸　武雄

花ぶさとうげ

講談社　1979

134p　22cm（児童文学創作シリーズ）

きし　たけお

花ぶさとうげ

昭和54年3月20日　第1刷発行
昭和54年9月17日　第3刷発行

定価850円

著　者　岸（きし）　武雄（たけお）

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112
電話　東京03(945)1111(大代表)
振替　東京8-3930

印刷所　廣済堂印刷株式会社
双美印刷株式会社

製本所　株式会社　黒岩大光堂

© 岸　武雄　1979　Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8093-189853-2253 (0)　　(児一)

■著者紹介

岸（きし） 武雄（たけお）

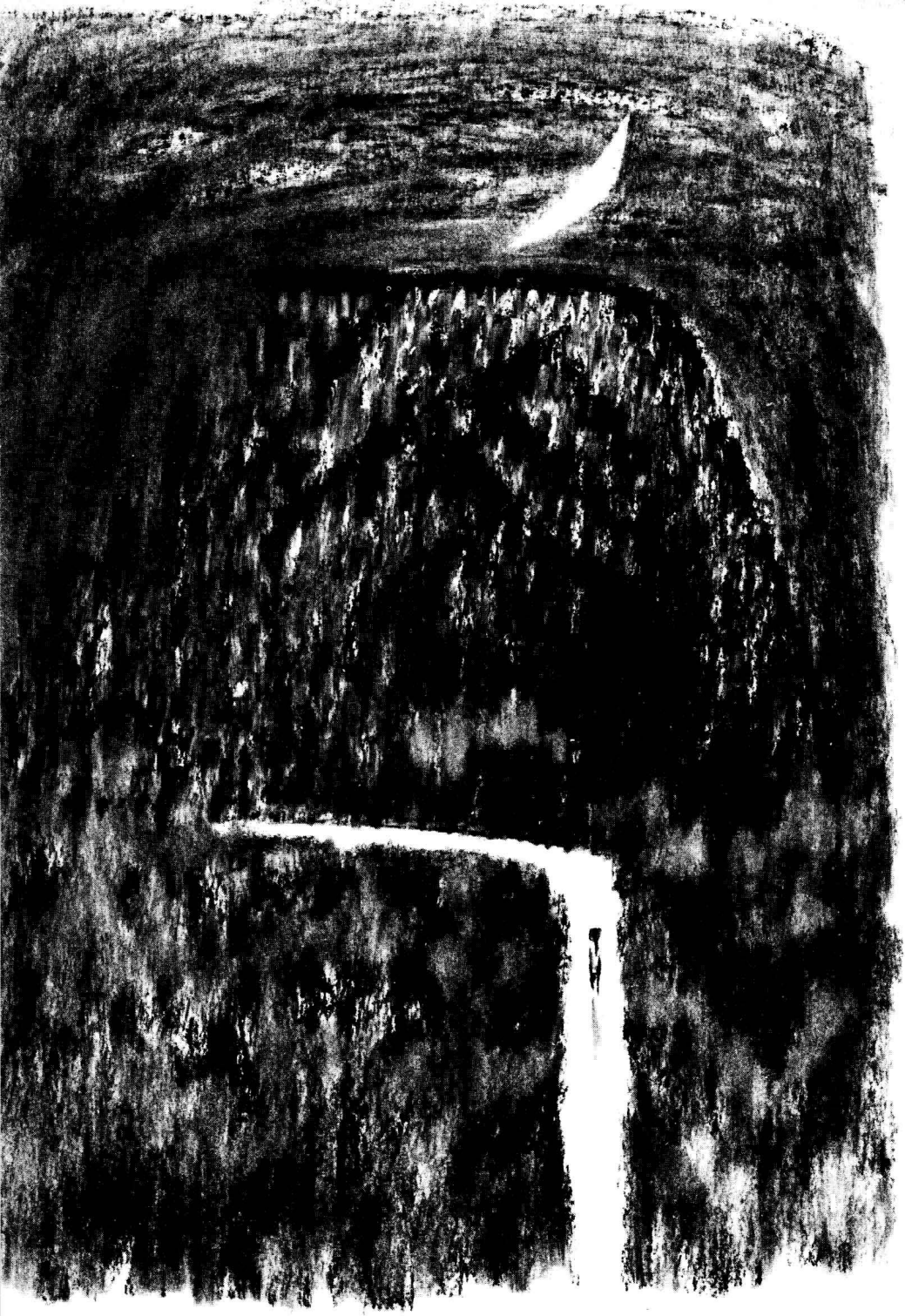
一九一二年、岐阜県に生まれる。岐阜師範卒業後教職に従事し、現在岐阜教育大学に勤務。一九六二年、川口半平、赤座憲久氏らと岐阜児童文学研究会を創設し、月刊雑誌「コボたち」を創刊するなど、児童文学の普及、発展に力を注いできた。創作活動では、一九七一年、「千本松原」（あかね書房）で野間児童文芸推奨作品賞を受賞。「もぐりの公紋さ」（童心社）、「炭焼きの辰」（偕成社）など、多くの作品がある。

■画家紹介

梅田俊作（うめだ しゅんさく）

一九四二年、京都府網野町に生まれる。日本デザインスクール卒業後、「あか・あお・きいろ」（学研）で、絵本の世界にデビュー。「のみこみとっつあ」（あかね書房）、「ねずみのすもう」（ポプラ社）など、おもに民話風の絵本で活躍している。さし絵にも、「なむくしゃら信平どん」、「どろんこぼっこ」（ともに講談社）のほか、多くの仕事がある。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com



もくじ

一　月の山道　6
二　つげのくし　16
三　花ぶさとうげ　25
四　けもの道　35

五　こじきのばあさま　47
六　百たたき　58
七　からっぽのひょうたん　67
八　海の落日　74
九　けちの平六　86
十　流れる年月　96
十一　瀬が谷の小屋　107
十二　そよ　119
十三　小さな墓石　131
著者紹介　134

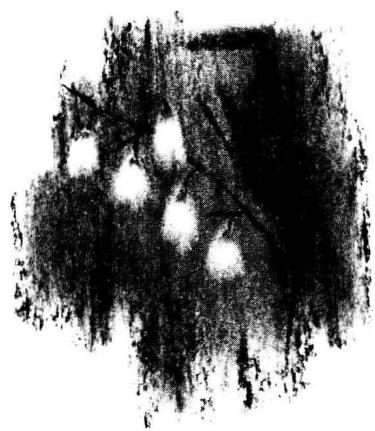
一　月の山道

子守むすめのサトが、血をはいた。つばきの花びらを散らしたような、まっかな血をはいた。

「ろうがいじゃ。……まんず、ようもってあと半年じゃろなあ。」

医者さまは、サトのまくらもとで、主人の徳右衛門にささやくようにいった。かくごしていたのであろう、徳右衛門は、口をへの字に結んでうなずいた。

サトは、ろうのような白い顔をして目をつむっていた。しかし、ねむっていたのではな



く、医者さまが立とうとするとき、
「ありがとうございました……。」
と、かの鳴くような声で礼をいった。ぎくっとした医者さまは、立ちどまって病人をふりむき、にげるように部屋をでていった。
ろうがいはいまの肺結核のことで、そのころは不治の病と思われていた。病人がでるとつぎつぎと人にうつり、家族全部が死に絶えることもあると信じられていたのである。
その日夜ふけて、作男の五助は徳右衛門の部屋によばれた。むずかしい顔でうで組みしていた徳右衛門がなにかいうと、五助はしらが頭をふってさからった。
「そんなむごいことは、わしゃ……。」
しかし、徳右衛門は声をひそめ、長々と話しつづけた。やがて五助は、こしの手ぬぐいで顔をおおいながら、首をたてにふった。
それから三日たった宵のこと――。
「医者さまへいくんじゃ。わしに負ばれてくれ。」

と、五助は目をふせたまませなかをサトにむけた。

「……すまんなあ、じい。」

サトは、部屋のすみの鏡をふりかえって髪をかきあげると、五助のかたに手をかけた。

——十四じゃというのに、まるで七つか八つの子どものように軽いわ。こうもまあ、わりゃやせてしまって……。

五助は、鼻じるをすすりあげた。

道はもう暗く、両側の田んぼからかえるがさかんに鳴きたてている。目をあげると山は黒々と行く手にそびえ、その上の空が夕ばえのなごりをとどめて、わずかに明るかった。

五助は、足を山のほうへむけた。医者さまの家とは反対の方角である。せなかのサトがおどろいて声をだすかと思ったが、あいかわらず、ほおを五助のかたにのせたままである。

「じつはな、サト。」

五助は、思いきってつらい話をきりだした。

「だましてつれだしたんじゃ。サト、こらえてくりょ。これから瀬が谷の山小屋へおまえを置きにいくのじゃ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「……」
「これ、サト、きいておるのか。」
「あい、わかっとる……。じい、わしは医者さまの話をきいておったもん。」
「な、なに。わりゃ、ろうがいってことも、知っておったのか。」
五助は、思わず足を止めた。
「あい、なにもかも。じい、ろうがいは、小さい子にはよけいうつるそうやなあ。わしが守りをしとる由ぼうや啓ぼうにうつったら、それこそおおごとじゃ。わしはそう思っただけでもつろうてつろうて……。じい、山へすてられるほうが、気が楽やわな。」
サトは、いままでためていたものをはきだすように、一息にいった。
「おお、なにもかも心得ていてくれたか。わりゃ、ちっさなころから、察しのええ、かしこい子じゃった。でも、な、サト、山へすてられるなんて思うなよ。瀬が谷の小屋は、わしもわかいころあそこで炭を焼いて、ねとまりしたこともあるが、ながめもええ、谷水も美しょい、空気もええ、あそこでゆっくりからだを休めりゃ、病もきっとなおるじゃろ。」
「……」

サトは、返事をしなかった。五助のそういってくれる気持ちはわかっていたが、いかにもそらぞらしくきこえたからである。サトは、

「わしの命は、ようもってあと半年じゃぞな。」

と、のどまででてくることばを、やっとこらえた。

山道の登り口で、五助はサトを帯でしっかりとせなかへくくりつけ、ちょうちんに火をつけた。足もとに黄色い輪ができると、あたりの暗さがよけい増してくる。

五助は、もくもくとのぼった。そのうちに坂が急になり、五助の息づかいがあらくなった。

「じい、人のせなかに負ばれるってことは、あんがいつらいもんやなあ。」

「おお、サト、むねでも苦しゅうなったか。」

おどろいた五助は、足を止めてふりむいた。

「いえ、いえ、からだはもったいないほど楽やけど、でも、この坂道をじいがのぼるかと思うと、つろうてなあ。」

「なんじゃ、そんなことか。サト、おまえってやつは、いつも人の苦しみばっか考えるや

つじゃ。……ほんとに、こんなやさしいむすめに、どうしてろうがいなどが、とっついたんやろのう。考えてみりゃ、わりゃ九つのときから赤んぼうをつぎつぎと背負わされ、せなかの休まるときはなかったもなあ。サト、きょうぐらいは、わしのせなかに、安気に負ばれてくれよ。」

サトは、いまから十三年前、徳右衛門の家の門先に、ねかされていたすて子であった。赤んぼうをくるんであったうぶ着が、いかにもそまつだったので、こじきの子ではないかとうわさされた。その赤んぼうを徳右衛門があわれんで、サトと名づけていままで育てたのである。

「おまえは、死んでいてもあたりまえのところを、だんなさまのお情けで救われたんじゃぞ。」

サトは、このことばをみんなから、どれほどきかされたかわからない。

はじめのとうげをのぼりきったところで、月がでた。五助は、いちめんにしものおりたようなすすきの原を、月をふりあおぎながらゆっくり歩いた。

サトはずっと小さいころにも、こうして五助のせなかで月を見たことがあった。サトが六つで、徳右衛門の長男喜八は八つであった。二人は五助につれられて、となり村の祭りを見にいき、帰り道ではすっかりくたびれてしまった。五助は、はじめ喜八を背負おうとしたが、喜八は、

「おら、男や。それにサトより年も二つ上じゃ。じい、サトを負んでやってくれ。」

と、きかなかった。

こうして、サトは五助のせなかに乗ることになったが、考えてみれば、人に背負ってもらったのは、そのときがはじめてであった。あのときのうれしさは、せなかからながめた月の美しさとともに、サトはわすれることがなかったのである。

「じい、喜八さまは、こんどのわしの山行きを知ってござるかえ？」

サトは、むねいっぱいのなつかしさをこめて、五助の耳にささやいた。

「知ってござるどころか、おまえの山行きが三日もおくれたのは、喜八ぼうがだんなさまのいうことをどうしても、きかなんだからじゃ。でも、みんなが口をそろえて、おまえの山行きのしかたがないことをいうたので、やっとあきらめてな、けさ、瀬が谷の山小屋

へ、おまえのふとんや食い物を背負っていった。

わしといっしょに、おまえをつれてのぼるはずじゃったが、喜八ぼうはな、おまえの顔を見るのがつらいとかいうて、先へ一人でいったのじゃ。いまごろは、もううちへ帰ってござるやろが、サト、喜八ぼうは口数こそ少ないが、心のあったかいお人じゃなあ。」

サトは、五助のせなかで深くうなずいた。

こうして、うちをでてから一時（二時間）ほどたって、瀬が谷の小屋についた。思ったとおりの小さなかやぶきの炭焼き小屋が、月の光にぬれてたっていた。

サトは、小屋の中にしいてあるふとんに、くずれるように横たわった。五助は、小屋の入り口に、サトにせなかをむけてすわった。

——いよいよ別れのときがきた……。

サトは、むねをしめつけられるような思いで五助のことばをまっていたが、五助はだまって手ぬぐいで首すじばかりふいている。

ふいに、ホーッとふくろうが、とぼけたような声で鳴いた。

「じい、はよ帰ってくれ。長うおると、別れるのがつろうなるで。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com